

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヤリイカ

学名 *Loligo bleekeri*

系群名 対馬暖流系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 1歳

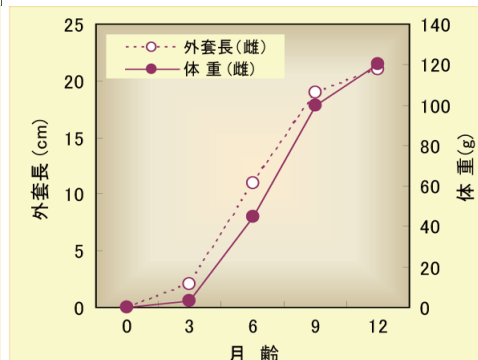
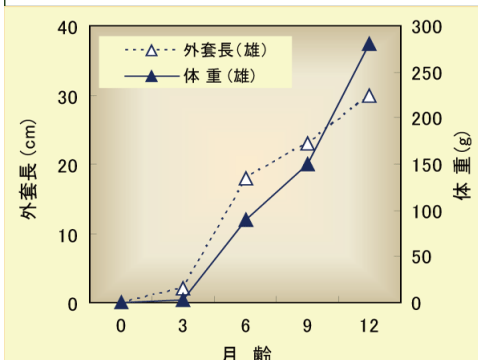
成熟開始年齢: 1歳

産卵期・産卵場: 本州日本海側で1～5月(2～3月中心)、北海道海域ではこれよりかなり遅く5～7月、沿岸の岩礁域、陸棚上の沖の瀬などに房状の卵塊を産み付ける

索餌期・索餌場: 夏～秋季に陸棚上、主に100～200mの水深帯

食性: 魚類、イカ類、端脚類、オキアミ、浮遊性甲殻類など

捕食者: 不明

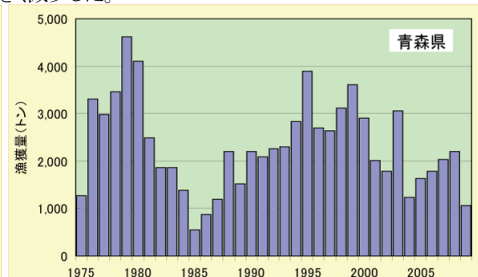
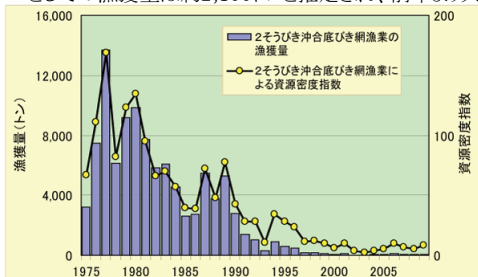


漁業の特徴

陸棚の発達する日本海西部海域(山口県～福井県)では沿岸から沖合の広範囲に分布し、各種底びき網漁業、いか釣り漁業、定置網漁業により漁獲される。盛漁期は10～3月である。日本海北部(石川県～北海道)では定置網や底建網の漁獲量が底びき網よりも多い。盛漁期は産卵期の冬季である。

漁獲の動向

日本海西部海域では沖合底びき網漁業によって多獲され、最大であった1977年の漁獲量は13,700トンである。しかしその後減少を続け、2009年の漁獲量は47トンと最盛期の僅か0.3%にすぎない。一方、日本海北部海域で最も漁獲量の多い青森県の漁獲量は、1970年代の終わりと1980年代の中頃までは西部海域と同様に減少した。その後1990年代に増加したが、2000年代前半には減少し、2005年以降増加傾向を示している。2009年の対馬暖流系全体としての漁獲量は約2,100トンと推定され、前年より大きく減少した。



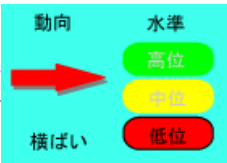
資源評価法

ヤリイカは農林統計の全国集計対象種でないため、公式統計がない地域が存在する。したがって、日本海西部海域では2そうびき沖合底びき網漁業の漁獲量と資源密度指数を、北部海域では漁獲量が多く、統計が古くから整備されている青森県の漁獲量の経年変化を用いた。

資源状態

1975年以降の2そうびき沖合底びき網漁業による資源密度指数は、1977年には168.5を記録したものの2009年にはその約4.9%の8.3にまで減少した。この30年ほどの間には数回、一時的な増加がみられたものの資源密度指数は減少の一途をたどって資源は低水準にある。一方、青森県の漁獲量の経年変化は、1985年までの減少傾向は西部海域の2そうびき沖合底びき網漁業の指数の傾向と符合するものの、1986年以降は変動しながら増加に転じた。

その後、1999年までは増加傾向にあったが、2000～2004年には2003年を除き大きく減少した後、2005～2008年に増加した。北部と西部では資源水準が異なるが、対馬暖流系全体として、資源水準は低位、動向は横ばいと考えられる。



管理方策

ヤリイカ資源は低水準にある。環境の影響も大きいと考えられるため、西部海域のヤリイカ資源が急速に回復する可能性は低いと思われる。一方、現在の分布の中心と考えられる北部海域においては、長期的に見て1985～1999年は増加傾向にあったが、2000～2004年に大きく減少した後、2005年以降は増加傾向に転じている。ヤリイカは単年生であるので、再生産が好転すれば資源も急速に回復する可能性がある。したがって産卵親イカを確保しながら、良好な環境下での大きな年級の発生を待つことによって資源の増大を図ることを目標とした。そこで、最近3年間の漁獲量の平均に0.8を乗じてABClimitとし、これに安全率0.8を乗じてABCtargetとした。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	2,800トン	0.8Cave3-yr	—	—
ABCtarget	2,200トン	0.8・0.8Cave3-yr	—	—

資源評価のまとめ

- 西部海域の資源指標である2そうびき沖合底びき網漁業による資源密度指数は1977年以降急減し、現在も低位で横ばい傾向
- 北部海域の資源指標である青森県の漁獲量は1985年まで減少したあと、1990年代まで増加した。2000年代前半に一旦減少した後、2005年以降は増加傾向を示したが、2009年は前年より大きく減少した
- 対馬暖流系全体としての資源水準は低位で横ばい傾向
- 海洋環境の変化も影響している可能性がある

管理方策のまとめ

- 環境の影響が大きいため、西部海域のヤリイカ資源が急速に回復する可能性は低い
- 産卵親イカをある程度確保し、大きな年級の出現を待つことが重要

執筆者: 田 永軍

資源評価は毎年更新されます。